

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20H01246

研究課題名(和文) 二十世紀ロシア文学の発展に関する総合的研究：異化・越境・ポスト近代を鍵概念に

研究課題名(英文) Investigation into the Evolution of the Twentieth Century Russian Literature:
Defamiliarization, Transgression, Post-Modernization

研究代表者

野中 進 (Nonaka, Susumu)

埼玉大学・人文社会科学部研究科・教授

研究者番号：60301090

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：「二十世紀ロシア文学の発展に関する総合的研究：異化・越境・ポスト近代を鍵概念に」という研究題目の下、世界文学史的に見ても特異な発展を遂げた二十世紀ロシア文学についての総合的研究を行った。鍵概念(=作業仮説)となるのは「異化・越境・ポスト近代」である。これによって二十世紀ロシア文学の発展の特殊性を明らかにできるとともに、それが二十世紀の世界文学において果たした普遍的役割も一定程度明らかにしえた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

二十世紀ロシア文学はソ連という特別な国家体制の下、特異な発展を遂げた。しかしその影響力は世界的に著しいものがあり、日本文学においても同様である。二十世紀ロシア文学の特殊性と普遍性を明らかにすることは、日本や東アジア、さらには世界の近代後発国の文学の発展についても知見を得られることになり、世界文学的な成果が得られた。また、半ばは偶然であるが、2022年2月から始まったウクライナ戦争の背景を理解するために、近現代のロシア文学とウクライナ文学についての知見は社会的意義があった。

研究成果の概要(英文)：Under the research title "Comprehensive research on the development of 20th century Russian literature: focusing on foreignization, border crossing, and post-modernity as key concepts," we will discuss 20th century Russian literature, which has achieved a unique development even from the perspective of world literary history. A comprehensive study was conducted. The key concepts (= working hypotheses) are "differentiation, border crossing, and post-modernity." Through this, we were able to clarify the peculiarities of the development of 20th century Russian literature to some extent, and also a universal role it played in 20th century world literature.

研究分野：ロシア文学、文学理論

キーワード：ロシア文学 文学理論 近代文学 世界文学

1. 研究開始当初の背景

二十世紀ロシア文学はその特異性においても、世界的影響力においても、世界文学史上、特異な存在であったと言っても過言ではない。十九世紀後半、リアリズム小説のジャンルが大きく花開き(ツルゲーネフ、ドストエフスキー、トルストイ等)、西欧でも注目されるようになったロシア文学は、世紀末からロシア革命前夜にかけて、いっそう独特な発展を遂げた。とくに特徴的なのは、その多様性であり、宗教性を色濃く持つ象徴派(プローク、ペールイ等)、プロレタリア文学(ゴリキー等)、過激さを追求した未来派(フレーブニコフ、マヤコフスキー等)などが百花繚乱的に栄えた。この時代が「銀の時代」(プーシキンらを輩出した十九世紀前半の「金の時代」に比して)と称されたのも偶然ではない。ロシア革命以後もこの多様性と前衛性は生き残り、1920年代のロシア文学はさまざまな文学的実験、また「亡命文学」の成立など、注目すべき事象が多く見られた。1930年代に入ると、スターリニズムの下、党と国家の締め付けが厳しくなり、「社会主義リアリズム」のもとに文学(および他の文化領域)が画一化されていったというのが以前の通説であったが、この二十年ほどこの通説の再検討と見直しが、世界的に進められてきた。

2. 研究の目的

本研究では「二十世紀ロシア文学の連続性と断絶性」という主要テーマを立て、複数の主要文学ジャンル(小説、戯曲、詩、亡命文学、ノンフィクション)について具体的・実証的検証を進めつつ、二十世紀ロシア文学が全体としてどのような発展を遂げたかを明らかにすることを目指した。

本研究では「異化・越境・ポスト近代」の鍵概念を設定し、二十世紀ロシア文学のいくつかのジャンルを中心に、その独自性と普遍性、地域性と世界性を研究した。以下、それぞれ簡単に説明する:「異化」とは二十世紀前半に活躍したロシアの文学批評家グループ、ロシア・フォルマリズムの概念である。「文学とは何か?」という問いに対してシクロフスキー(1893-1984)は、異化することこそ文学(かつ芸術全般)の原理であると述べ(論文「言語の復活」「手法としての芸術」等)、二十世紀の文学理論に多大な影響を及ぼした。「異化」とは読んで字のごとく「異なったものに化す、見慣れないものにする」という意味である。ただし「何を異化するのか」という点に曖昧さが残っている。二種類の異化があると言われ、一つは従来の芸術形式を破壊し、「見慣れないものにする」(アヴァンギャルド的原理)とされ、もう一つは「芸術を通じて現実(生)を見慣れないものにする」現実批判・現実変革の作業である。われわれは後者の意味での異化を重視する。ロシア文学がなぜ大きな社会的影響力を持ち、他の国々でもそのような読まれ方をしたか?それは、ロシア文学がもつ「現実を異化する力」のためでないかと思われる。現実を模写するのではなく作り変える、より具体的には行動のためのモデルとして機能する—それが、近代ロシア文学が世界を魅了した最大の特徴である。この特徴は二十世紀ロシア文学についても基本的特徴として存在し続けたと考えられる。

次に「越境」とは文字通り、国の境界、社会集団の境界など、個人を越えるものとして存在する社会的枠組を越え出ることを指す。ロシア文学の場合、伝統的に、いくつかの重要な越境があった。まず政治的信条により国境を越える「亡命」であるが、十八世紀の近代化以来、祖国を離れて、西欧やアメリカ、アジアに住む動きがあった。だが、ロシア革命後は社会主義革命を拒否して、数百万の亡命者が出て、十九世紀以前とは規模を異にする「越境」が生じた。これにより「亡命ロシア文学」という新しい文学カテゴリーが出現し、二十世紀ロシア文学の重要な「もう一つの顔」となったことはよく知られている。本研究では「ソ連文学 vs 亡命文学」という図式的な対立は避け、両者の<間>に存在し続けた人間的・文学的・思想的交流に着目した。この交流によって二十世紀ロシア文学の発展が、他の国々の文学にはない内的対話性と緊張を持ち続けたのである。1991年のソ連解体後は「亡命文学」のカテゴリーは「移民文学」となり、今もなお、本国の文学との対話と相互影響を続けている。ロシアにおいて文学とはまさに「越境」するための手段であったと言える。「越境」は二十世紀ロシア文学の発展を見直す上で、最も重要な概念である。

最後に「ポスト近代」について述べる。社会主義革命と社会主義建設は、二十世紀史上最大の実験であったと言っても過言ではない。この実験が「失敗」に終わり、歴史的過去となって三十年以上が過ぎた今日、この実験をどう意味づけるかという問題はいまだに有効である。本研究では、社会主義革命と社会主義建設を「近代の超克」の一つと考える立場をとる。「先発国」たる西欧を追う「近代後発国」がさまざまな「近代の超克」を考案したことはよく知られている(独のナチズム、伊のファシズム、日本の「近代の超克」など)。社会主義革命によって資本主義段階を「飛び越える」というレーニン主義も「近代の超克」の一パタンと見ることが可能である。事実、スターリニズム時代の住民たちは自分たちの国家の「先進性」を強く意識し、誇りとしていた。ソ連解体後、ロシアでポストモダン論が流行したのは、必ずしも西欧の現代思想の影響ばかりでなく、そもそもソ連という国家に「モダン(近代)を超える」という要素が存在したことが大きい(M. Epstein, *After the Future*, 1995)。ポスト近代の動きが近代後発国から生まれるということはけっして逆説的な事態でなく、多くの後発国で見られるなかば合法的現象であ

る。ソ連をその典型例と見る立場は有効であるだろう。本研究では、二十世紀ロシア文学を「ポスト近代」性の芸術的表現の試みと捉えようとするものである。たとえば、二十世紀ロシア文学の代表的作家の一人、アンドレイ・プラトーフ(1899 - 1951)はスターリニズムに誠実に順応しようとしつつも、その作品が体制にまったく受け入れられなかった作家(その完全な再評価はソ連解体後に実現した)である。なぜこのような事態が起きたかと言えば、プラトーフ文学の先鋭化されたポスト近代性が体制に受け入れがたいレベルまで達していたからだと考えられる。プラトーフ以外の作家でもハルムス、ソルジェニーツィン、農村派のような「ポスト近代派」(近代的価値観の乗り越えを測った作家たち)の流れは二十世紀ロシア文学の重要な特徴であり、二十一世紀の現在、再評価にふさわしい分析対象である。以上のように「異化・越境・ポスト近代」という鍵概念は、二十世紀ロシア文学の発展を総合的に捉える上で有効である。この鍵概念に基づいて二十世紀ロシア文学の全体像を特徴づけ、その発展の独自性と普遍性を明らかにすることが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究プロジェクトは2020年春から始まった新型コロナの世界的流行のために大きな影響を被った。対面の研究会や海外調査がほぼ不可能になったため、メールやオンライン会議などで連絡を取りつつ、研究代表者・分担者の個別研究が当初計画より大きな位置を占めた。

基本的には、研究代表者・分担者がそれぞれ担当した分野に関してテキスト分析を主とした研究を進め、2022年度以降は国内外の出張により調査を補完し、国際会議に参加し成果発信を行った。

4. 研究成果

本プロジェクトでは多くの成果が得られたが、ここでは書籍を中心に紹介しつつ、関連する論文も合わせて紹介するという形式を取りたい。

まず、エルヴィン・ナギ著、野中進訳『革命記念日に生まれて——子どもの目を見た日本、ソ連』(東洋書店新社、2020年)を挙げたい。これはエルヴィン・ナギ(1930-2021)というユダヤ系(旧)ソ連人の回想である。ロシア文学では伝統的に「回想」のジャンルが重要な役割を果たしてきた。ナギ氏は職業的作家でなく、一般のソ連人であったが、子どもの頃日本で暮らしていたという経緯もあり、きわめて興味深い回想録であるため、野中が訳出・出版した。20世紀ロシア文学の発展を理解する上で、ソ連時代の社会(スターリン時代～戦争～戦後)についての調査は不可欠である。その意味でも、この回想録の研究と訳出には大きな意味があった。翻訳書は産経新聞、『AERA』などで書評が出て、一般の読書界にも歓迎された。

次に、野中進著『ロシア小説講義ノート』(埼玉大学教養学部リベラルアーツ叢書、2022)がある。これは19～20世紀のロシア小説の発展とその特異性について講義録スタイルで論じた書物である。ここで野中は「異化、越境、ポスト近代」という本プロジェクトの鍵概念に沿って、19～20世紀ロシア小説の発展を論じた。中心的問いとなったのは「近代後発国にとって長編小説とはどのようなメディアであったか」という問いである。ロシアや中東欧、アジア、アフリカの近代後発国にとって、近代化をどのように進めるかという問いはきわめて重要かつ複雑なものであった。西欧から半ば強制的に導入させられた「近代」という新しい生活様式・社会原理をどのように受け入れ(あるいは拒み)実現する(あるいは変容させる)か、はすべての後発国で不可避の問いであった。その問いについての社会的議論のためのメディアとなったのが、長編小説(the novel, роман)というジャンルであるというのが本書の基本的主張である。20世紀になり、「近代の超克」が多くの国々で唱えられるようになったが、社会主義革命と社会主義建設を掲げたソ連という新国家もまさにそうした「近代の超克」の一つと見ることができる。そのため、ソ連文学は当初から「近代の超克」という主題を内包しており、その点に他の近代後発国への持続的・潜在的な影響力の秘密を見ることができる。このようにして、19～20世紀のロシア・ソ連文学は世界において特殊性とともに普遍性を発揮することとなった、というのが本書の趣旨であり、これは他の分担者の研究にも影響を受けつつ実現した成果である。なお、本書は当初、非市販であったが、2023年12月にはPDF改訂版を作成し、インターネット上で公開した(現在も公開中)。これは一般の読書人が簡単に入手できるようにするためであり、学術成果の社会発信の試みである。

最後に挙げたい主要成果が、Shinichi Murata and Stefano Aloe (eds.), *The Reception of East Slavic Literatures in the West and the East*, Firenze: Firenze University Press, 2023である。これは研究分担者の村田真一が中心となって開催した同名の国際会議(Firenze University, 2-3 March, 2023)を書籍化したものであり、本研究プロジェクトからは村田の他、古宮路子、宮川絹代が参加・寄稿している。この国際論集は近現代の「東スラヴ文学」(ロシア、ウクライナ、ベラルーシ文学)が西欧や東アジアでどのように受容(翻訳・紹介)されてきたかをテーマとしている。本研究プロジェクトの鍵概念のうち「越境」ととくに関連が深く、ある文学作品が国境や文化圏を越えて移動するとき、どのような意味変容が起こるかについて様々な角度からアプローチしたものである。また「異化」と「ポスト近代化」についても受容研究において有効な概念たりうることが本論集を通して示された。なお、上述の国際会議についてはセルビアの学術誌に報告記録が発表され、国際的な発信となった: *Ичин К. International Conference "The Reception of East Slavic Literatures in the West and the East" (2-3 March 2023, Ca' Foscari—University of Venice). // Зборник Матице Српске*

за Славистику, 103 (2023). С. 524-528. また、論集そのものについては研究代表者・野中が書評を執筆中であり、2024 年度中に発表予定である：野中進「書評：Shinichi Murata and Stefano Aloe (eds.), *The Reception of East Slavic Literatures in the West and the East*, Firenze: Firenze University Press, 2023」, *Slavica Kiotoensia*, vol. 4 (2024)。これによって本研究プロジェクトについての学術的総括を行うとともに、社会的発信も図れるものと考えている。

以上挙げた 3 冊の書籍の他に、多くの学術論文、学会報告を行った。最初に述べたように、コロナ禍とウクライナ戦争のためにロシアやウクライナへの出張ができず、条件的には万全ではなかったが、十分な学術成果が得られたと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名		4. 巻 4(22)-12
2. 論文標題	" " . . .	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Art Logos ()		6. 最初と最後の頁 122-134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし		査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難		国際共著 -

1. 著者名 Michiko Komiya		4. 巻 23
2. 論文標題 The Problem of ' Knowledge ' in LEF and A. Voronsky ' s Literary Controversy		5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Interface		6. 最初と最後の頁 5-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし		査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難		国際共著 -

1. 著者名 Gretchko Valerij		4. 巻 6(1)
2. 論文標題 Between Linguistics and Ideology: Lev Iakubinskii on Social Dialects		5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Linguistic Frontiers		6. 最初と最後の頁 46-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし		査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難		国際共著 -

1. 著者名		4. 巻 29
2. 論文標題 1910-20- . 20- :		5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Slavica Tergestina		6. 最初と最後の頁 202-221
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし		査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難		国際共著 -

1. 著者名 野中進	4. 巻 58(2)
2. 論文標題 差別語のメトニミー的原理について または能力主義をめぐる学生たちとの対話	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 埼玉大学紀要(教養学部)	6. 最初と最後の頁 87-103
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野中進	4. 巻 Vol. 6, n. 4
2. 論文標題 人は何に慣れることができ、何を忘れてはいけないのか:A. プラトノフの伝統主義によせて【原文ロシア語】	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Studia Literarum 世界文学研究所	6. 最初と最後の頁 300-313
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.22455/2500-4247-2021-6-4-300-313	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野中進	4. 巻 53
2. 論文標題 学術書評 V. A. ファテーエフ『N. N. ストラーホフ:人格、創作、時代』サンクトペテルブルグ、2021	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『ロシア語ロシア文学研究』	6. 最初と最後の頁 257-269
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宮川絹代	4. 巻 1
2. 論文標題 リディヤ・チェルヴィンスカヤの詩における接頭辞 半- 【原文ロシア語】	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代言語学の課題:チーホノフ講座:A.N.チーホノフ教授90歳記念国際学会	6. 最初と最後の頁 130-134
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Valerij Grecko	4. 巻 1
2. 論文標題 Unreliable Witness: The Yasusada Affair and the Problem of Fictitious Authorship.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Natur in der Lyrik und Philosophie des Anthropozan	6. 最初と最後の頁 323-339.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野中進	4. 巻 35
2. 論文標題 「何を笑っているんだ？自分のことを笑っているんだぞ！」再論：世界文学的アプローチの試み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『Slavistika』（東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報）	6. 最初と最後の頁 359-371
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 グレチュコ、ヴァレリー	4. 巻 Vol. 12
2. 論文標題 : (現代ロシア詩における多言語性：類型論の試み)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Interface. Journal of European Languages and Literatures	6. 最初と最後の頁 85-110.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 グレチュコ、ヴァレリー	4. 巻 35
2. 論文標題 :	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『Slavistika』（東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報）	6. 最初と最後の頁 103-115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 古宮路子	4. 巻 1
2. 論文標題 書きかえられた結末：ポスト革命期の検閲によるYu.K. オレーシャの戯曲『感情の陰謀』の変更（原文ロシア語）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ロモノソフ記念モスクワ国立大学文学部編集出版評議会編『ロシア文学：20世紀と現代』	6. 最初と最後の頁 269-280
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古宮路子	4. 巻 35
2. 論文標題 映画から新聞へ セルゲイ・トレチャコフとファクトの文学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『Slavistika』（東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報）	6. 最初と最後の頁 509-524
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 3件/うち国際学会 6件）

1. 発表者名 村田真一
2. 発表標題 二人のフェードラ：ダンツィオとツヴェターエワの演劇における音楽性・メタファー・悪魔性【原文ロシア語】
3. 学会等名 国際会議「ロシア ヨーロッパ：劇作家たちの対話」（サンクトペテルブルグ）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古宮路子
2. 発表標題 生活と芸術 レフとA.ヴォロンスキーの文学論争
3. 学会等名 日本ロシア文学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮川 絹代
2. 発表標題 ブーニンの『アルセーニエフの人生』と日本の私小説：初めと終わりの問題
3. 学会等名 ブーニンとロシアおよび諸国文学、国際学会資料、エレヴァン（オンライン）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 村田 真一
2. 発表標題 20世紀前半のロシアと日本におけるドラマツルギー
3. 学会等名 演劇文化の対話 - ロシアと日本（サンクトペテルブルク芸術史研究所）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Shinichi Murata
2. 発表標題 Listening to “The Orchard” : Rethinking the Sound Aspect of Chekhov ’ s Play in Japanese and Italian Productions
3. 学会等名 The Reception of East Slavic Literatures in the West and the East (2-3 March 2023, University of Venice)（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kinuyo Miyagawa
2. 発表標題 The Full Verb to be in the Translations of the Works of I. A. Bunin into Japanese and English
3. 学会等名 The Reception of East Slavic Literatures in the West and the East (2-3 March 2023, University of Venice)（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Michiko Komiya
2. 発表標題 Korehito Kurahara and “Proletarian Realism”: Proletarian Literature in Japan in 1920s
3. 学会等名 The Reception of East Slavic Literatures in the West and the East (2-3 March 2023, University of Venice) (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 Valerij Gretchko, Hye Hyun Nam, Susumu Nonaka, Soohwan Kim, (eds.)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Logos	5. 総ページ数 428
3. 書名 , Russian Culture on the Crossroads of History: Far East, Close Russia. Vol. 4.	

1. 著者名 エルヴィン・ナギ、野中進	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東洋書店新社	5. 総ページ数 438
3. 書名 革命記念日に生まれて 子どもの目で見た日本、ソ連	

1. 著者名 野中進	4. 発行年 2022年
2. 出版社 埼玉大学教養学部リベラルアーツ叢書	5. 総ページ数 244
3. 書名 ロシア小説講義ノート	

1. 著者名 Shinichi Murata and Stefan Aloe (eds.)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Firenze University Press	5. 総ページ数 322
3. 書名 The Reception of East Slavic Literatures in the West and the East	

1. 著者名	4. 発行年 2023年
2. 出版社	5. 総ページ数 172
3. 書名	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	村田 真一 (Murata Shinichi) (00265555)	上智大学・外国語学部・教授 (32621)	ロシア演劇および世界におけるその影響(上演、解釈)の研究
研究分担者	古宮 路子 (Komiya Michiko) (00733023)	東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・助教 (12601)	ソ連文学の校訂研究、および1920 - 30年代のソ連文学の論争とその日本への影響などの研究
研究分担者	宮川 絹代 (Miyagawa Kinuyo) (40757366)	東京大学・大学院総合文化研究科・学術研究員 (12601)	20世紀亡命ロシア文学の研究

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	Grecko Valerij (Gretchko Valerij) (50437456)	東京大学・教養学部・特任准教授 (12601)	20世紀ロシア詩と言語思想の研究

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会	開催年
The Reception of East Slavic Literatures in the West and the East (University of Venice, March 2-3, 2023)	2023年～2023年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------